

教育実践報告

学生とともに創る「教育実践特講」 ～子どもや保護者や地域から信頼される教師を育成する授業の創造～

増田 吉史

“Special Lectures on Educational Practice” Created Collaboratively with Students-
The Creation of Classes to Foster Educators Who Are Trusted by Children, Guardians,
and the Local Community

MASUDA Yoshifumi

要 旨

小学校教育の成否は児童に直接携わる教師にかかっている。その質の充実は育成する大学側にあり、教育にはいつの時代でも重要な課題が山積している。いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、ICTの活用をはじめとする様々な課題であり、中心的には学力の向上や家庭・地域との連携協力の必要性である。このような中で、保護者や地域社会から信頼される教師となるために、学生のもともと持っている多様でかつ優れた資質能力を伸ばし補充し、一人の人間としての資質能力を高め、教師としての自信と誇りを持たせたい。その具体策を「教育実践特講」の授業実践として記録していく。

キーワード

教師の資質向上 教員採用試験対策講座 学びあい高めあう教師 信頼される教師
学習指導要領

目 次

- I. 研究主題
- II. 主題設定の理由
- III. 研究の内容
 1. はじめに、2. 各県が求める教師像、3. 松本大学「教育実践特講」のねらい
 4. 教材の作成、
- IV. 授業の具体
 1. 個人面接を通して、2. 集団討論を通して、3. 集団面接を通して、4. 模擬授業を通して、
 5. 場面指導を通して、6. 論文授業を通して、
- V. 授業外の実践から
- VI. おわりに
- VII. 参考文献、引用文献

I. 研究主題

学生とともに創る「教育実践特講」
～子どもや保護者や地域から信頼される教師を
育成する授業の創造～

II. 主題設定の理由

小学校教員の大量退職、新規採用教員の急増、
教員不足の傾向は首都圏から地方都市に移りつ
つある。学生には日々の教育実践の記録をしっ
かりとり、実践研究報告を常に発信し続ける教
師になってほしい。

そのためには学生である今現在から、学校現
場の実態を理解し、これからの教育のあり方を
考える力を身につけさせたい。それには大学の
研究との融合が必要になり、一人ひとりの子ど
もたちの人間形成のために学校現場と大学が緊
密な連携をしなくてはならない。

筆者は、小学校現場で実践を通して直接子ど
もたちの問題に対応してきた。この経験を生か
し、大学の授業のあるべき姿を考察する必要性
を常日頃から強く思っている。

中教審の「教職生活の全体を通じた教員の資
質能力の総合的な向上方策について」の諮問^(※1)
のとおり、「教員の資質能力向上」のために、本
学教育学部は尽力しなくてはならない。

今後、新任教員が味わうだろう小学校現場の
想像以上の業務の多忙さや、子どもや保護者と
の関係からくるストレスなど、教員を巡る状況
は厳しい状況にある。それを乗り越えられる人
材を育成する。

真摯な日々の実践の積み重ねは教師となる学
生への要求だけでなく、我々教育学部教員にと
っても教育実践報告の積み重ねはきわめて重要
である。しかし本学教育学部の歴史が浅く、教
育実践の価値浸透のためにはまさにスタートラ
インに着いたところである。

そんな中でも教育学部一期生も2019年4月に
は3年生になり、前期には半数の学生が小学校教
育実習を体験した。教師を目指す学生にとって
「教育実践特講」は教員採用試験対策に通じる授
業であり、生きた課題解決力と実践力を身につ
けさせる大切な場である。

III. 研究の内容

1. はじめに

松本大学教育学部は2017年4月に開設した。1
年生で学校ボランティア、2年生で学校インター
ンシップの体験を経て、3年生では小学校教育実
習も始まった。まじめで何事にも一所懸命に取り
組み、パワーある学生達である。こういう学生
達には将来教員になってほしい。

しかし公立小学校教員を目指すには教員採用
試験を突破しなくてはならない。

2020年夏にはいよいよ教員採用試験に挑戦す
ることになる。松本大学教育学部の学生には、
どんなに時代や社会が変わろうと、どんなに厳
しい教育課題が行く手を阻もうと、子どもたち
の方をしっかりと見据え、子どもたちに寄り添
い、常に子どもたちのために働き、子どもの味方
であり続ける教師になってほしい。それなりの
教養を真剣に身につける努力を継続してほしい。

2. 各県が求める教師像

各県の教育委員会が示す、目指す教師像は以
下のとおりである。

1)長野県の場合

○こんな人を求めています

- ・教育者としての使命感と責任感を持ち、社会人として規律を遵守する人
- ・教育への情熱を持ち、真摯に子どもを理解し

ようとする人

- ・豊かな人間性と広い視野、確かな人権意識を持ち、子どもや保護者の思いに共感できる人
- ・同僚や保護者、地域の方々と協力し、共に汗を流し行動する人
- ・創造性と積極性があり、常に向上し続けようとする、心身のたくましさを持っている人
- ・幅広い教養と教科等の専門的な知識・技能を持ち、柔軟に対応することができる人
- ・探究的学びや、校内外での様々な活動に対して、積極的に取り組むことのできる人

2)新潟県の場合

○こんな人を求めています

- ・コミュニケーションを大切にしながら、周囲との信頼関係を構築する人
- ・学び続けることの重要性について理解し理想の教師像や目指す授業像の実現に向けて努力する人
- ・教職への誇りと情熱、児童生徒への愛情をもつ人
- ・豊かな人権感覚をもち、法令や服務規律を遵守し、責任をもって自らの職務を果たす人
- ・学習指導要領の目標と内容に沿って、児童生徒の実態に合った授業を行うことの重要性を理解している人
- ・いじめや不登校等の背景にある問題の把握と問題解決に向けた適切な指導・支援が重要であることを理解している人

3)東京都の場合

○教育に対する熱意と使命感をもつ教師

- ・子供に対する深い愛情
- ・教育者としての責任感と誇り
- ・高い倫理観と社会的常識

○豊かな人間性と思いやりのある教師

- ・温かい心、柔軟な発想や思考
- ・幅広いコミュニケーション能力

○子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師

- ・一人一人のよさや可能性を見抜く力
- ・教科等に関する高い指導力
- ・自己研さんに励む力

○組織人としての責任感、協調性を有し、互いに高め合う教師

- ・より高い目標にチャレンジする意欲
- ・若手教員を育てる力
- ・経営参加への意欲

(以上、3県を例示した)

共通しているのは、子どもに常に真摯に向き合う覚悟を持っているかということだ。人には必ず長所や欠点、得意不得意はあるが、そんなことより、心から教師になろうという心が大切だと思う。

3. 松本大学「教育実践特講」のねらい

2年生後期に開設された「教育実践特講」は、各県教育委員会が求める教師力をつけていくが、あくまでも大学の授業科目であり、教員採用試験対策講座(後述V. 2)ではない。

学生達にはますます厳しくなると言われている学校現場であるが、このような時代に小学校教師を目指す以上、しっかりとした問題解決力を身につけ、多様化する子どもや保護者たちに適切な対応できる力を育成してほしい。

このことは、松本大学校歌の作詞者である松崎一氏(1983年～1993年まで松商学園短期大学学長)の回想録「和は半生」(信濃毎日新聞松本専売所、2011年5月18日閲覧)に、(以下引用)

「私は要領が悪かったせいもあるが、学長という職務は予想以上に忙しいことがわかった。はじめは学生たちとひざを交えて話す機会があると思っていたが、そんな機会はなかなか来ないのだ。そこで私は卒業するまでに各ゼミのクラ

スへ必ず一度は訪ねようと考え、実施しはじめたが、これもなかなか困難だった。短大の校歌を作詞してほしいと要請されたのはそれから間もなくだった。もちろん詩については素人。作詞のルールらしきものすら知らなかった。「筑摩野に／明(あか)き陽昇り／蒼穹に／希望は踊る……略」曲は才能教育研究会の故鈴木鎮一先生が情熱を込めて作って下さった。曲が付くと不思議なものでこれが私の作った詞なのかと思うほど立派に思えた。短大にはほとんど毎日出かけたが、学生たちは私の顔をなかなか覚えてくれなかった。事務室で言葉を交わしたある女子学生は、「先生は何を教えておられますか」と、まじめな顔で私に尋ねた。これには思わず苦笑してしまったが、このような風景はよその大学でもあることらしい。どうやら学生たちは教科担当以外の教師の顔は覚えようとしないうのだ。父がかつて私を政治家にでもさせたくて、名前を書きやすいように「一」と付けたと聞いたことがあった。だが、学生たちに顔を覚えられないようでは、とても政治家どころではないとあらためて思った。赴任して一年後の昭和59年「蒼穹」という広報誌の発刊を提唱し創刊した。学生たちと紙面を通してコミュニケーションができればと思ったのである」として。

その校歌の三番の歌詞は、「アルペンの茜の雲に／青春の想いをのせて／励めかし学びの日々を／いとおしく後に偲ばん／若き日のまたとなければ」とある。

二期生以降の将来構想も、学びあい高めあう教師をめざすことであり、まさに「励めかし学びの日々を」であり、やがては「後に偲ばん」である。

4. 教材の作成

そこで現実の学校現場に密着した実践的演習を多く取り入れる。

今までも自分が、現場の教員の生の声や悩み

をもとに研究を継続してきたし、様々な資料を蓄積してきた。多くの学校現場に直接行って校内研究等の支援をしてきた。これらの経歴と経験を生かし、教師を目指す学生に、生きた問題解決力を身につけさせる教材を開発することにした。

毎年、各都道府県教育委員会が優秀な教員を確保するために工夫を凝らして実施している教員採用試験は、本授業を構成するにあたって大いに参考にしていく。教員採用試験の問題や実技の中に、学生が教師をめざし学びを重ねていく上で、積極的に取り入れたいポイントが多数凝縮されている。

- 1) 小学校現場で毎日のように起こる具体的な事象を提示し、学生なりに対処を考え、グループで協議し、集団面接型でその考えを討議させる。
- 2) 同様に論文型で、考えをまとめさせる。
- 3) 場面指導や模擬授業も取り入れ、それをもとに学生同士で考えを発表しあい、その場面指導や模擬授業をお互いに見合いながら、具体的に協議していく。
- 4) グループ討論や場面指導や模擬授業をみて助言を行っていく。

この教材を使用しながら、学生同士が助け合い学びあえるように授業を構成した。

IV. 授業の具体

1. 個人面接を通して

教員採用試験二次試験で個人面接を受けた学生による復元(十文字学園女子大学・VI. 3謝辞参照)で質問された内容の概要は次のとおりである。これを「マイ参考書」に回答を書き込めるように作成した。

A タイプ(本人の身上にかかわる)例:一部

- ・ 志望動機
- ・ 大学で頑張ったこと

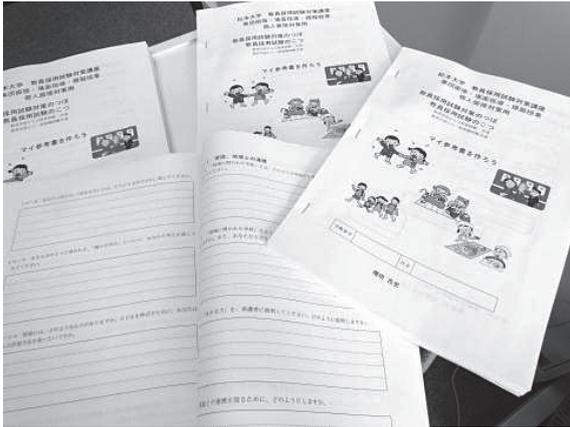


図1. 自主作成教材「マイ参考書」

- ・部活動
 - ・卒業論文
 - ・ボランティア
 - ・教育実習
 - ・教育以外で興味があること
 - ・自己アピール
- などである。

2. 集団討論を通して

集団討論議題集(増田作成・実際事例)から
(以下一部例示)

- 1) 給食指導で悩んでいます。食事のおしゃべりが多く、楽しそうでいいのですが、うるさいときがあります。時間内に食事が終了しない子どもがいます。先日、栄養士さんから、残量が異常に多い、原因は何かを調査して報告してくださいと言われました。
- 2) A 小学校は校庭の片隅に狭い飼育小屋があります。生活科の授業や委員会活動で役立っています。全校の子どもたちにも人気があり、中には動物たちにあうのを楽しみに登校している子どももいます。最近は環境問題の観点から給食調理は廃材が出ません。えさ代に困ります。長期休業中の飼育も昔は子どもたちの当番制にしていたのですが、最近は防犯の観点から出来ません。鳥インフルエンザの時期は特に心配です。

動物アレルギーの子も多数います。動物が病気にかかった時の費用はありません。最近になって動物愛護の団体から「日本小動物獣医師会」の意見を添えて、環境の悪い学校での小動物の飼育は動物虐待であり、教育的にも問題があると指摘されました。

3) A 小学校ではある保護者から「うちの子は生まれてから、一度も水道の水を直に飲んだことがないので水筒持参を許可してほしい」という訴えがありました。県水道局は「本県の水はおいしい。水道から直に飲めます」と宣伝しています。

4) A 小学校では長年「あいさつが出来る子」を教育目標に掲げていますが、年度があらたまるたびに元に戻ってしまい、なかなか目標実現が図れません。

5) A 学校では毎年、5年生対象の県の学力調査(学年末の3月に実施)に参加しています。5月にその結果が県から報告されました。今回は大幅に A 小学校の平均点が低下しています。

6) A 教諭は生徒指導主任に代理で町会の会議に参加してほしいと言われてしまった。参加してみると、町会長さんたちや、地域の方々が大勢参加され、「最近、公園のこどもたちの使い方が悪く困っている。落書きも多いし、食べ物を散らかしたまま帰ってしまうし、禁止されているボール遊びや危険な遊びをやり、注意しても言うことを聞かない」と、学校に対しての苦情が出されました。

7) A 小学校の第1学期の終業式の日、午後になって、通知表の評定に対する疑問やクレームが数件、学校に対して寄せられました。

3. 集団面接を通して

県によっては長時間を集団面接にかけているので、質問内容も多岐にわたっている
B タイプ(教育論)一部例示



図2. 課題を読んで集団討論



図3. 模擬授業や場面指導

- ・学力を身につける授業とは
 - ・いじめを起ささないために
 - ・不登校の定義は何
 - ・基本的な生活習慣とは何
 - ・協力的でない保護者がいたらどうする
- Cタイプ(教師論)一部例示
- ・地域との連携
 - ・学級づくり
 - ・社会人として心がけること
 - ・教師の専門性とは
 - ・教師のストレス発散方法は
- Dタイプ(学習指導)一部例示
- ・漢字の指導に対する保護者からの苦情

4. 模擬授業を通して

復元(前述)を見ていくと、模擬授業を取り入れている県教委も多い。東京都は指導計画を持参させている。さいたま市は、指導案が会場においてあり、それをもとに模擬授業をする。

- ・あまりのある2位数÷1位数の授業
- ・テーマは様々
- ・「物語」「チームワーク」「職業」「季節」「発表会」・「生命尊重」

5. 場面指導を通して

- ・児童が教室で激しく嘔吐した
- Eタイプ(生徒指導)一部例示
- ・顔にあざをつくって登校してきた
 - ・クラスでドッジボールをしようとしたときにある児童が「私下手だからやりたくない」と言った。
 - ・クラス開きの時に「前の先生の方が良かった」と児童に言われた
 - ・校外学習のグループ決めの時、自分の意見ばかり言って他人の意見を受け入れない児童がいた
 - ・席替えに不満を言う
 - ・「この成績じゃお父さんに叱られる」と激しく泣き出した
 - ・宿題をやってこない児童への対応
 - ・うちの子がいじめられているという保護者に
 - ・朝食を食べてこない児童に

6. 論文授業を通して

教育行政(教育委員会関係者)から見た論文採点の観点。論作文は県ごとに字数も時間も問題のタイプも違う。子どもの多様性を生かす指導のあり方を問う問題や、漢字一文字を提示して思いを書かせるタイプ、東京都のように長い事



図4. 模試風景

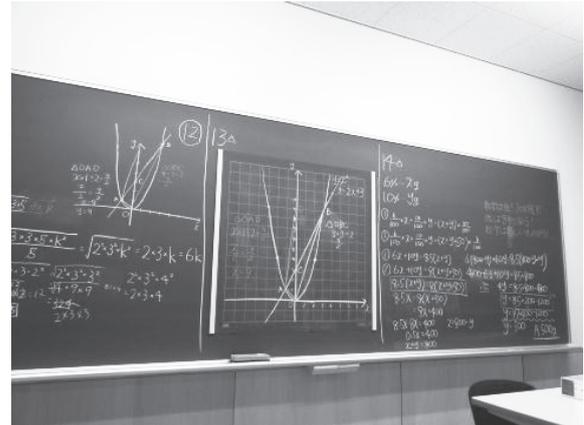


図5. 自主ゼミ(学生の板書)

例を提示して、それに対する考えを求めるものもある。

いずれの場合も必ず「あなたの考え」を述べさせ、それにかかわる「あなたの体験」を求めている。学生にとって、「体験」をどう捉えるかが重要だと思う。

V. 授業外の実践から

1. マツダイ模試

松本大学教育学部では、将来主に公立教育職員を目指す教職課程履修学生を支援するため、教職センター会議のもとに、教員採用試験対策支援会議が置かれ、教員採用試験対策センターが設置されている。すでに「マツダイ模試」を中心に、2年生に今までに3回の模試を実施している。2018年11月には東京アカデミー全国模試に2年生として参加しているし、2期生の1年生も参加した。

2. 教員採用試験対策講座、自主ゼミ

教員採用職員採用試験に向け、学生の個別面談や相談指導に当たると共に、「教員採用対策講座」と命名した講座も年間を通して運営出来るように、2019年度時間割を調整した。

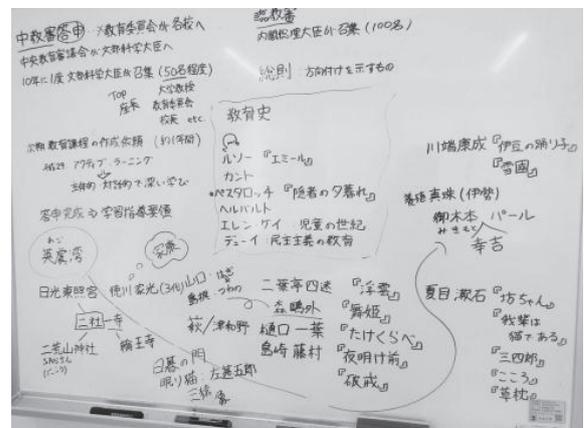


図6. 学生の板書、すぐに間違い直し



図7. 絵を描きながらの自主ゼミ

3. マイ参考書

教員採用試験対策のつぼとこつ(IV謝辞参照)「マイ参考書」を作成した。

このマイ参考書の活用の仕方は、(一部例示)

- ・分からないものや不安なもの
- ・友達と情報交換
- ・話し言葉でまとめる
- ・数名のグループでお互いに質問し合う等である。

VI. おわりに

1. まとめ

教育者が講演会等でよく使うのが「本気でやる子を育てるために必要なポイント、“五者”」がある。“五者”とは、

- ①「学者」…豊富な知識を有すること。卓越した問題解答能力を有すること。
- ②「役者」…子どもとの強い信頼関係、良好なクラス環境を構築する力を有すること。
- ③「易者」…最新の入試動向・受験情報・進路情報を分析し、的確な進路指導ができること。
- ④「芸者」…励まし、やる気にさせる力を有すること。
- ⑤「医者」…子どもの精神面・体力面で万全のフォローができること。の5つを表すとしている。

筆者は独自に「忍者」を加えている。指導はたっぷりするが子どもたちが自立して出来るようになったら、あたかも子どもたちが最初から自分で分かったように振る舞えるように、後ろに下がり、教師の存在を消す。この話題は、授業の中で語られることが多かった。

2. 学生の感想(抜粋・一部要約)

本授業の中間授業評価で、この授業の感想を書いてもらった。以下はその抜粋である。

・まだ2年生と思っていたが、実際の教採試験まであと2年もないと考え受講した。今期は忙しいカリキュラムの中であつたが、受講し本当に正解だつたと思った。まず授業の形式が実践的で

あるため一回ごとの内容が深く、自分の経験として積み重なっている実感がした。受講したメンバーは強く教師志望を抱いているため、集団面接や討論で意見を交わすと未知の考えや価値観に触れることができた。それが自分の考え、価値観、そして人間性の高まりにつながっていくように感じた。二次試験全般、そして小論文にもチャレンジする中で、経験だけでなくコツややる気をつけるポイントも知ることが出来たので、とても知識がついた。(MW)

・二次試験については内容をあまり知らなかったので勉強になっている。担当教員が小学校勤務時の経験を語ってくれるので演習に生かされており、それが本講義の特色だと思う。(HH)

・担当教員や仲間同士で教え合いができるのでよかった。細かいところも聞けて良い。ほどよい緊張感があるのも良かった。(KT)

・二次試験の雰囲気を感じることができた。共通のテキストが配布されているので、テキストを元に良い点改善点を検討でき、自己の力を磨き、高めることが出来た。(OK)

・教員採用試験の内容には、模擬授業、場面指導、集団討論、面接など多くものがあることを知った。演習を行うことで、試験の厳しさを学んだ。(KI)

・集団面接で気をつけることや、小論文の構成の仕方等等、今まで気付かなかった新たな見方ができた上に、二次試験に対して前向きな威勢を持つことが出来るようになった。(IK)

・実践的である。特に模擬授業や場面指導は、試験官に見せるために行うことであるとわかった。学んだ内容についての疑問をすぐにフィードバックしてくれるのもよいところだと思う。(TH)

・とにかく実践的に学ぶことができる授業だった。自分の意見をまとめ伝えるのが苦手である私にとって絶対に必要な授業だと思う。自分の課題を再確認すると同時に、担当教員や仲間か

らの意見をもらうこともできるし、仲間の姿そのものから学ぶことができた。本当に受講してよかった。(IH)

・面接や論文対策ができ有意義だと思う。回数を重ねて場数を踏んで上達するものだと思うからである。慣れだけでなく、話し方や内容を考えるこつも学ぶことができ質が上がってきている。最終的には、教師になったときの実践力につながってくると思う。(TK)

・自分では面接はうまくこなせる方だと思っていたが、実際に行くと6割程度の力しか出せないことに気付いた。しかし最初の頃に比べると、考えの述べ方ができるようになってきた。人の面接や模擬授業の様子も見られて勉強になった。(ME)

3. 謝辞

本実践と研究に際しては、十文字学園女子大学教職課程センター発行の教員採用試験ハンドブック(毎年)「Dreams come true 夢を叶える」小学校教員採用試験受験報告を、本授業を構築に際し参考にさせていただいた。これは十文字学園女子大学児童教育学科の小学校教員採用試験受験者による主に二次試験の復元をまとめたものである。

その第1号は十文字学園女子大学児童教育学科一期生(2007年4月入学～2011年3月卒業)で、2010年8月末の教員採用試験2次試験を受験し、ホッとしたところでも、「自宅に戻らず大学に戻ってきなさい」と指示し、戻ってきたらパソコンの前に座らせ、「人間一晩寝ると記憶が薄れるので覚えている今のうちに全部思い出して書くように」と指示し書かせたものを冊子にしてまとめたのが始まりである。当時の学生からは「鬼!!」と言われたが、二期生(2008年4月入学～2012年3月卒業)からは、この先輩たちの努力の結晶の冊子を大いに参考にさせてもらい教員採用試

験勉強をしてきたので、受験後大学に戻って復元するのが当然のようになり、増田が在職していた七期生(2013年4月入学～2017年3月卒業)までは持っていたのでそれを元に、八期生の分は、十文字学園女子大学教職課程センターおよびリメディアル教育センターより郵送して頂いた。

個人面接、集団面接、模擬授業、場面指導などは都道府県によってその様相が違うが、「Dreams come true 夢を叶える」には、学生達が受験した、埼玉県、さいたま市、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、相模原市、千葉県、新潟県などが掲載されている。

今年2019年実施の教員採用試験には10期生(2015年4月入学～2020年3月卒業予定)が挑み、学科在籍学生数70名中55名が教員採用試験一次試験を突破し、昨年も二次試験合格者は35名で、2019年4月から正規教員として教壇に立っているとの報告を受け、伝統を継続していることによりうれしく思ったところである。

自主研究がテキスト「教員採用試験突破・つぼとこつ」は、増田が作成に関わってきた部分があり、USBにその原稿が残っていたことと、同様に最新版も郵送して頂き、使用させて頂いた。

心より感謝申し上げるとともに、同大学での実践を参考に、松本大学教育学部一期生が必ず、この長野県松本市の地、この大学らしい新しい形の伝統を構築し継続し、成長し成果をあげていくものと確信している。すでに二期生(2018年入学)たちも先輩の姿を見て「自分たちも勉強したい」と申し出があり、増田は自主ゼミという形で算数数学講座始めている。

Ⅵ. 参考文献、引用文献

1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」東洋館出版(2017年7月)

※1:引用

教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(諮問)、22文科初第492号

中央教育審議会

(本研究主題との関連が深い部分を引用する)

……(以下引用)……

学校教育の成否は幼児・児童・生徒の教育に直接携わる教員にかかっており、その質と数の充実はいつの時代も最も重要な課題の一つであります。一方で今日、学校現場ではいじめ・不登校等の生徒指導上の諸課題への対応、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、ICTの活用をはじめとする様々な課題が急増するとともに、学力の向上や家庭・地域との連携協力の必要性も指摘されており、これらの課題に応えるためにも、教員の実践的な指導力やコミュニケーション能力の更なる向上が求められています。

(中略)

・このような中で、保護者や地域社会から信頼される学校づくりを進めていくためには、多様かつ優れた資質能力を有する教員を養成・確保するとともに、教員一人一人が資質能力を高めながら自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得られるような環境を整えていくことが重要であり、教職員定数の改善など教員の数の充実に関する施策とともに、教員の質の向上に取り組んでいく必要があります。

(中略)

・教職大学院制度の創設、教員免許更新制の導入等が実現しておりますが、学校現場の抱える課題に必ずしも十分に対応できていないといった指摘もあり、教員一人一人が教職生活の各段階を通じてより高度な専門性と実践的な指導力を身に付けられるよう更なる改革が求められています。このため、これまでの改革の成果と課題も踏まえつつ、教員養成・採用・研修の各段階について改めて点検し、見直すことが今こそ必

要であります。

その際、特に重視すべきは、学校教育における諸課題の複雑・多様化に対応して教員に求められる専門性を今一度見直し、養成段階を含めた教職生活の全体を通じて不断に資質能力の向上や専門性の高度化が図られていくようにするため、教員免許制度と教員養成・採用・研修の各段階を通じて一体的・総合的な取組が行われるようにすることです。

(中略)

・教員は、養成段階を含めた教職生活の各段階を通じてその時々で様々な課題への対応が求められるため、教職に就いてからも不断に資質能力を向上させ、専門性を高めていくことが極めて重要であります。教職生活の全体を通じて基盤となる資質能力は、第一義的には養成段階で培われるべきものであり、学校種ごとの実態を踏まえつつ、教員として教壇に立つために必要な基礎的な資質能力を着実に身に付けられるような教員養成の在り方について御検討いただきたいと思えます。

(中略)

・また、地域や企業など学校とは別の分野で活躍している多彩な人材が学校現場に参画しやすいしくみづくりなど、学校現場を活性化していくための方策についても、具体策をお示しいただきたいと考えております。](後略)